地域住民の“気に入りの場所”形成に係わる必要条件に関する研究

Requirements to Improve the Open Space and its Related Spaces as Places of Meaning

包清博之* 杉本正美*
Hiroyuki KANEKIYO Masami SUGIMOTO

摘要：これまでの、生活環境に対する住民意識の調査から、“オープンスペース及び関連空間”（“O.S.R.S.”）の多様性が生活環境の満足感の高さに対応するとの結果が得られた。この観点に立ち、本研究では、“気に入りの場所”として、地域住民から認識・嗜好される“O.S.R.S.”を形成するための必要条件を把握することを目的とした。具体的には、福岡市を対象に、市街地を分類し、各分類について、土地利用の特性把握及びアンケート調査を行った。この結果、各市街地条件で求められる“O.S.R.S.”の条件、生活年数、訪問頻度、環境の質などからみた、“O.S.R.S.”が“気に入りの場所”として嗜好されるための条件が把握できた。

1. はじめに—研究目的—

都市におけるオープンスペースの存在の重要性は、これまで様々な視点から指摘されている。また、オープンスペースを新たに確保することは、多種多様な人々の諸活動が営まれる都市の中で、多様な価値観に対応した快適な生活環境を形成するための重要な条件の一つとなることが指摘されてきている¹⁾。しかし、商業施設や業務施設などの集積の見られる多くの市街地では、オープンスペースを新たに確保することが困難な状況にある。

一方、市街地の中には、オープンスペースに加えて、建蔽地に確保されたアトリウム空間や、街路の一角に確保された広場など、様々なオープンスペースに準じる空間が存在している。このような、市街地に存在するオープンスペースやこれに準じる空間としての多様な“オープンスペース及び関連空間”（以下、“O.S.R.S.”）では、様々な自然の環境諸要素や多種多様な人々の諸活動をみることができる。

これらの“O.S.R.S.”が、日常生活の中で地域住民から認識され、嗜好される質を備えた“O.S.R.S.”、即ち“気に入りの場所”として選択される場合、地域住民の生活環境に対する満足度の向上に寄与することはこれまでの研究で指摘した²⁾。このことは、“O.S.R.S.”を、地域住民の生活環境の質を向上させる契機となる重要な空間として捉える必要のあることを示している。つまり、地域住民にとって満足感の高い快適な生活環境を創出するためには、多様な“O.S.R.S.”を、地域住民から認識され、嗜好される空間として計画的に形成する必要があると考える。

そこで本研究では、“気に入りの場所”として、地域住民から認識・嗜好される“O.S.R.S.”を形成するための必要条件を探ることを目的とした。具体的には、まず“O.S.R.S.”の存在とその認識に係わる条件の検討を通じて、どのような“O.S.R.S.”を地域住民が認識できるようにする必要があるのかを把握した。次に、“O.S.R.S.”が“気に入りの場所”として嗜好されるための条件を把握するため、アンケート調査を通じて、生活年数、訪問頻度、選択理由について検討した。なお、本研究では福岡市をスタディエリアとし、小学校区を調査単位とした。

2. “O.S.R.S.”の存在とその認識に係わる条件の検討

一般に、地域住民は、様々な活動の場で“O.S.R.S.”を認識する可能性がある。そこで、まず市街地の形成に係わる諸条件

（以下、市街地条件）に従って市街地を分類し、次に、“人々の諸活動の場”を土地利用に求め、その特性把握を通じて各市街地条件で求められる“O.S.R.S.”について検討した。

（1）市街地条件の分類とその分布

市街地条件の分類にあたっては、スタディエリア全域の小学校区（141 小学校区）を対象に、制度的な側面及び人口特性の側面について検討し、主な市街地の分布の把握を通じて、市街地条件の分類を設定した。

具体的には、制度的な側面として、市街化区域や市街地開発事業の有無³⁾を、また人口特性の側面として、人口密度の高低及び人口増減率⁴⁾の土を指標とし、各小学校区（141 校区）について検討すると、市街地条件として 28 分類が設定できた。この中から、主な市街地条件を把握するため、まず、28 各分類に該当する小学校区を数え、5ヶ所以上の小学校区数の該当する分類を取り上げた。さらに、それらの中で、市街化区域を含む分類を抽出した。この結果から、主な市街地条件の分類を、表-1 に示す如く把握した²⁾⁶⁾。

なお、ここで市街地の形成に係わる制度⁷⁾をとりあげたのは、それが都市公園や都市緑地、道路や各種の公共施設などの都市系の“O.S.R.S.”、また、農地や森林等の自然系の“O.S.R.S.”などの存続に係わっていることによる。また、人口特性は、都市公園などの設置目標が住民一人当たりの面積を指標としていることや、人々の利用が多く見込まれることが様々な商業施設等の立地条件の指標の一つとなっていると考えたことによる。

表-1 に示した市街地条件の各分類の分布は図-1 に示す如くである。なお、図中の空白の小学校区は、主な市街地条件以外の

表-1 5ヶ所以上の小学校区の該当する市街地条件の分類

市街地条件の分類 (該当小学校区数)	分類 A	分類 B	分類 C	分類 D	分類 E	分類 F	分類 G
	(5)	(31)	(5)	(36)	(14)	(11)	(13)
分類のための指標	人口減少		人口増加				
人口増減 (昭和 60 年～平成 2 年)	人口減少		人口増加				
人口密度 (昭和 60 年)	福岡市全体の平均 (33.6 人/ha) 以上						平均以下
市街化区域	全域が市街化区域					一部市街化調整区域	
市街地開発事業	全域	一部	全域	一部	なし	一部	

*九州芸術工科大学芸術工学部環境設計学科

図-1 市街地条件の分布

図-2 市街地条件の分類と土地利用

分類に該当している。

この表-1 及び図-1 から、以下の分布特性が把握できる。

- ・分類 A, B の人口が減少傾向にあり、人口密度の高い市街地の多くは福岡市の中心部に位置している。
- ・人口密度が高く、人口の増加傾向にある分類 C, D, E, F および市街地の縁辺部に位置する人口密度の低い分類 G は、中心部の市街地を取り巻くように分布している。

(2) 各市街地条件で求められる“O.S.R.S.”の条件

ここでは、(1) で設定した各市街地条件の分類毎の土地利用からみた“人々の諸活動の場”の分布特性について、地域住民が認識できる可能性のある“O.S.R.S.”を検討した。具体的には、森林、水面、田畑を自然系の、交通用地、住宅地、公園緑地、商業業務地を都市系の土地利用に対応した“人々の諸活動の場”とし、それらの面積の割合を把握した。各市街地条件での主な土地利用の割合は図-2 に示す如くである。この図から、以下の諸特性を把握した。

- ・森林や田畑などの自然系の土地利用に対応した“人々の諸活動の場”の割合は、全域が市街化区域に含まれる分類 A, B, C, D, E で明らかに低く、特に中心部の市街地に位置する分類 A, B では殆ど存在していない。一方、市街化調整区域を

含む分類 F, G では、比較的高い割合で存在している。

- ・都市系の割合は分類 A, B, C で極めて高く、D, E でも比較的高い。また、分類 F では、人口密度の低い G と比べると、比較的高い割合で存在している。
- ・都市系の“人々の諸活動の場”についてみると、人口が減少傾向にある分類 A では、特に交通用地及び商業業務地に対応した“人々の諸活動の場”の割合が多く、住宅地に対応した土地利用の割合は比較的小さい。

以上の特性から、中心部の市街地では、都市系の“人々の諸活動の場”の存在している割合が高く、縁辺部の市街地ほど自然系の“人々の諸活動の場”の存在している割合の低いことが把握できる。これらの特性から、各市街地条件で、地域住民がどのような“O.S.R.S.”を認識できる必要があるのかについて、以下の諸点が考察できる。

- ・人口が減少傾向にある中心部の市街地では、都市系の“人々の諸活動の場”に対応した“O.S.R.S.”を、地域住民が認識できるようにする必要がある。
 - ・市街地の中心部では、自然系の“人々の諸活動の場”に対応した、既に貴重な空間である“O.S.R.S.”の保全又は活用を通じて多様性のある“O.S.R.S.”を確保し、それらを地域住民が容易に認識できるようにする必要がある。
 - ・人口密度が高く、人口が増加傾向にある分類 C, D, E, F では、将来、減少することが推察できる自然系の“O.S.R.S.”の存続と保全を図り、都市系の“O.S.R.S.”を含む多様な“O.S.R.S.”を地域住民が認識できるようにする必要がある。
 - ・人口密度が低く、人口が増加傾向にあり、市街地の縁辺部に位置する分類 G では、多く存在する自然系の“O.S.R.S.”の保全と共に、都市系の“O.S.R.S.”を、“気に入りの場所”として地域住民が認識できるようにする必要がある。
- なお、ここで把握した諸条件は、都市系及び自然系の“O.S.R.S.”を併存させ、多様性のある“気に入りの場所”の形成を図るための基礎的な必要条件であるといえる。

3. 住民意識からみた“気に入りの場所”に関する検討

“O.S.R.S.”を、地域住民から嗜好される“気に入りの場所”として形成するためには、以下の3点の違いに基づく条件を把握・検討する必要があると考えた。

- ・地域住民の生活年数の違いによって生じる生活環境の満足感や“気に入りの場所”の多様性の違いに基づく条件
- これらの違いから、地域住民の嗜好に対応した多様な“O.S.R.S.”の確保の必要性や、容易に嗜好される“O.S.R.S.”の種類に関する条件が把握できると考えた。
- ・“O.S.R.S.”への訪問頻度の違いに基づく条件
- これらの違いから、各種の“O.S.R.S.”が嗜好されるためには、どの程度の地域住民の利用に対応した“O.S.R.S.”の存在が重要であるのが把握できると考えた。
- ・“O.S.R.S.”で享受できる環境の質の違いに基づく条件
- これらの違いから、各市街地条件での“O.S.R.S.”の保全や確保に当たって、どのような環境の質の提供が重要な条件となるのが把握できると考えた。

以上の条件を把握するため、生活環境に対する満足度と多様な“気に入りの場所”の選択状況、地域住民が“最も気に入りの場所”として訪問する頻度とその選択理由について、アンケート調査を行った。

(1) アンケート調査の概要

アンケート調査では、主に次の設問を設定した。

- ・生活環境の満足度に関する設問：
(非常に満足、やや満足、満足でも不満でもない、やや不満、

非常に不満の5段階評定の設問)

- ・ “気に入りの場所” として地域住民が嗜好している “O.S.R.S.” に関する設問：
（「自宅の周りで実際に利用したことがある気に入りの場所」を複数選択形式で回答してもらう形式の設問）
- ・ “最も気に入りの場所” として選択した “O.S.R.S.” の場所とその理由及びその場所の訪問頻度に関する設問：
（「最も気に入りの場所を1ヶ所」をアンケート調査票に添付した地図上に記入してもらう形式の設問、また「地図上にその場所が見当たらない場合は、該当する場所の名称か地名又は最寄りの目印となる場所の名称」を記入してもらう形式の設問、「その場所を気に入っている理由」について、複数選択形式で回答してもらう形式の設問）

なお、本調査は平成5年度に実施し、被験者の総数は641人であった。また、アンケート調査票は、先述の各市街地条件について回答の得られることを意図し、各市街地条件の分類A、B、D、E、Gに位置する15箇所の街区公園又は近隣公園の周辺地域（各都市公園の誘致圏の面積約4倍の範囲）に配布した。回答は郵送とした。図-3は、先に設定した市街地条件の分類毎に回答の得られた地域と被験者数である。

（2）アンケート調査の結果及び嗜好される “O.S.R.S.” についての考察

アンケート調査の回答から、前述の3点の違いに基づく条件について、以下、把握・検討した。

（i）地域住民の生活年数の違いによって生じる生活環境の満足感や “気に入りの場所” の多様性の違いに基づく条件

生活環境に対する地域住民の満足度の高さは、“気に入りの場所” として選択された “O.S.R.S.” の多様性と関係していることは、既にこれまでの研究²⁾の中で述べた。しかしながら、このような生活環境に対する満足度は、市街地で生活を始めて間もない地域住民と、長く生活している地域住民とは異なり、“気に入りの場所” として嗜好される “O.S.R.S.” の種類にも違いがあると考えられる。また、いずれの生活年数の地域住民にとっても満足度の高い生活環境が望まれる。

そこで、生活年数からみた地域住民の生活環境に対する満足度の高低は、“気に入りの場所” として嗜好される多様な “O.S.R.S.” の確保の必要性の指標として捉えることができると考えた。また、生活年数の違いからみた “気に入りの場所” の種類数の違いは、様々な “O.S.R.S.” が “気に入りの場所” として嗜好される場合に必要の年数の長さ、つまり多様な “O.S.R.S.” に対する嗜好の容易性を示す指標として捉えることができると考えた。

これらのことを踏まえ、生活年数からみた生活環境に対する満足度の違い、生活年数からみた “気に入りの場所” の種類数の違いについて把握・検討した。なお、表-2は、本研究で設定した “O.S.R.S.” の種類とアンケート調査票の設問の選択項目を示している。

①生活年数からみた生活環境に対する満足度の違いに基づく条件

アンケート調査の結果から、生活環境に対する満足度と生活年数との対応状況を図-4に示す如く集計した。この図から、生活年数からみた生活環境に対する満足度の違いとして、以下の諸特性を把握した。

- ・市街地条件の分類A、Bでは、20年未満の生活年数の地域住民で、10～20年の生活年数より短い地域住民ほど、生活環境に対する満足度が低い。
- ・分類Cでは、5年以上10年未満の生活年数の地域住民で、生活環境に対する満足度が、他の生活年数と比較して顕著に高い。
- ・分類Dでは、いずれの生活年数の地域住民でも、生活環境に

表-2 “O.S.R.S.” の種類とアンケート調査での選択項目

“O.S.R.S.”の種類	アンケート調査での選択項目
種類1:文教施設関係	学校の運動場
種類2:公共業務施設関係	役所などの公共施設の周り
種類3:公園関係	公園
種類4:街路関係	街路樹のある道、駅前の広場、車の入らない細い道、自宅の周りの路上
種類5:河川・森林関係	河原などの広いはらっぱ、自由に入れる雑木林、近くのため池や川等の水辺、砂浜や埠頭などの海岸、街角の大きな樹木のある場所
種類6:歴史関係	緑の多い寺や神社の境内、史跡・旧跡、古い町並
種類7:住宅地関係	団地内の広場や遊び場、自宅の庭
種類8:商業・業務地関係	現代的な建物のある町並み、ヒルの周りの広場
種類9:農地関係	田畑の周りやそのあぜ道
その他	特になし

図-3 市街地条件と被験者数

図-4 生活環境に対する満足度と生活年数

対する満足度は「やや満足」より低く、ほとんど変化がない。

- ・分類 E では、5 年未満の生活年数の短い地域住民よりも、生活年数の長い地域住民の満足度が低く、また 5 ～10 年以上でほとんど変化がない。
- ・分類 F では、生活年数の長い地域住民ほど、生活環境に対する満足度のばらつきが大きい。
- ・分類 G では、10 ～20 年未満の生活年数よりも短い地域住民ほど満足度が高い。また、20 ～30 年の生活年数で満足度が高い。つまり、この分類 G では、10 ～20 年未満の生活年数での満足度が最も低い。

生活環境に対する満足度は、いずれの生活年数の地域住民にとっても高いことが望ましい。このことを踏まえると、上記での把握した特性から、“気に入りの場所”の必要性について以下の諸条件が考察できる。

- ・全ての生活年数で、地域住民の生活環境に対する満足度の高い市街地条件は見当たらない。このことから、いずれの市街地条件の地域でも、地域住民から“気に入りの場所”として嗜好される多様な“O.S.R.S.”の確保の必要性が高い。
- ・生活年数からみた満足度の違いは、各市街地条件で様々な場合がみられる。このことから、“気に入りの場所”として嗜好される多様な“O.S.R.S.”は、各市街地条件での生活年数からみた満足度の違いの様々な場合に対応して確保する必要がある。

②生活年数からみた“気に入りの場所”の多様性の違いに基づく条件

ここでは、①での検討を踏まえ、さらに、地域住民の生活環境に対する満足度の向上に係わる“気に入りの場所”が選択されるための条件を把握する。このため、地域住民の生活年数と“気に入りの場所”の種類数との対応について検討した。

図-5 は、市街地条件の分類毎に集計した“気に入りの場所”の種類数と地域住民の生活年数との対応状況を示している。

この図から、いずれの市街地条件でも、生活年数の短い地域住民が“気に入りの場所”として嗜好する“O.S.R.S.”の種類数の少ないことがわかる。このことから、いずれの市街地条件でも、様々な種類の“O.S.R.S.”を、地域住民が容易に嗜好できるようにする必要があるといえる。また、市街地条件によって、生活年数からみた“気に入りの場所”の種類数の違いとして、以下

の特性が把握できる。

- ・分類 A, B での 20 年未満の生活年数、また、分類 G での 10 年未満及び 10 年以上 40 年未満の生活年数では、生活年数の長い地域住民ほど、“気に入りの場所”の種類数が多い。
- ・分類 C では、5 ～30 年の生活年数では、生活年数が長い地域住民で、“気に入りの場所”の種類数が少ない。
- ・分類 D, E では、生活年数に係わらず“気に入りの場所”の種類数は少ない。
- ・分類 F では、10 ～20 年の生活年数で、地域住民の“気に入りの場所”が 3 種類程度であり、他の生活年数では少ない。

これらの特性及び①での把握内容を踏まえると、幅広い生活年数の地域住民から容易に嗜好される“O.S.R.S.”の多様性を拡大するためには、以下の諸点が条件になると考える。

- ・分類 A, B では、比較的多くの種類の“O.S.R.S.”が、生活年数の長い地域住民から“気に入りの場所”として嗜好されていることから、“気に入りの場所”として嗜好される可能性のある多種類の“O.S.R.S.”が存在していると推察できる。一方、生活年数の短い地域住民は、生活環境に対する満足度が低い。これらのことから、既存の“気に入りの場所”を基調に、生活年数の短い地域住民でも容易に嗜好できる“O.S.R.S.”を確保することが条件の一つとなる。
- ・分類 G は、種類数について分類 A, B と類似した傾向にあるが、生活環境に対する地域住民の満足度は、生活年数の長い地域住民で低い。このような市街地条件では、前記の図-2 で示す如く都市系の“O.S.R.S.”が少ない。このことから、この市街地条件では、容易に嗜好できる都市系の“O.S.R.S.”の多様性を確保することが条件の一つとなる。
- ・分類 D, E では、“気に入りの場所”の種類数が少なく、また、生活年数によってほとんど変化しない。このことから、“気に入りの場所”として嗜好される既存の“O.S.R.S.”の数、または種類数の少ないことが推察できる。また、生活年数からみた満足度は、いずれもほとんど差がない。このことから、“気に入りの場所”として嗜好され易い“O.S.R.S.”の数またはその種類数の増加を図ることが条件の一つとなる。
- ・分類 C 及び分類 F では、一部の生活年数を見ると、“気に入りの場所”として選択し易い“O.S.R.S.”が多くはないが存在していることが推察できる。しかしながら、地域住民の生活環境に対する満足度のばらつきも多いことから、これらの分類についての傾向には、他と比較して被験者数の少ないことが影響していることも考えられる。

(ii) “O.S.R.S.”への訪問頻度の違いに基づく条件

“O.S.R.S.”には、地域住民から高い頻度で訪問される場所として認識されている場合と、低い訪問頻度であっても“気に入りの場所”として認識されている場合がある。このことから、“O.S.R.S.”が地域住民から嗜好されるためには、“O.S.R.S.”の存在していることが条件となる場合と、更に容易に利用できることが条件となる場合とがあると考えた。

いずれの場合が特に重要な条件となるのかは、“O.S.R.S.”への地域住民の訪問頻度の違いとして捉えることができると考えた。このため、地域住民が“気に入りの場所”の中でも“最も気に入りの場所”として選択している“O.S.R.S.”への訪問頻度の違いについて把握・検討した。

地域住民から、“最も気に入りの場所”として選択されている“O.S.R.S.”の種類(表-2 参照)と、その訪問頻度との対応状況は、図-6 に示す如くである。この図から、“O.S.R.S.”への訪問頻度について、以下の特性を把握した。

- ・全体的に、“最も気に入りの場所”は、月に数回程度の頻度で訪問する場所として認識されている傾向にある。

図-5 “気に入りの場所”の種類数と生活年数

- 同一種類の“O.S.R.S.”であっても、異なる市街地条件では、異なる頻度で訪問する場所として認識される場合がある。
- 比較的多い頻度で訪問される場合としては、分類 A の市街地条件での「週に数回程度」の頻度での訪問に対応した街路関係（種類 4）の“O.S.R.S.”がある。
- 比較的小さい頻度で訪問される場合としては、分類 A、E での「年に数回程度」の頻度での訪問に対応した歴史関係（種類 6），分類 B、D、G での文教施設関係（種類 1）の“O.S.R.S.”がある。

これらの特性から、地域住民から嗜好される“最も気に入りの場所”では、全体的に「月に数回程度」の頻度での訪問に対応した“O.S.R.S.”として存在していることが条件として捉えることができる。また、比較的に利用されることが条件となる場合としては、分類 A での街路関係の“O.S.R.S.”が挙げられる。一方、存在していることそのものが、比較的重要となる場合としては、分類 A、E での歴史関係の“O.S.R.S.”，分類 B、D、G での文教関係の“O.S.R.S.”が挙げられる。

なお、市街地条件の各分類によって、地域住民から“最も気に入りの場所”として選択された“O.S.R.S.”の種類は限られている。このことは、多様な“人々の諸活動の場”に対応した“O.S.R.S.”が存在する（図－2 参照）にも係わらず、地域住民が容易に選択し、訪問できる“最も気に入りの場所”として形成されていないことを示唆していると考える。

（Ⅲ）“O.S.R.S.”で享受できる環境の質の違いに基づく条件
 同一種類の“O.S.R.S.”であっても、市街地条件によって多くの地域住民から嗜好される場合と嗜好されない場合がある。また、高い頻度で訪問する場所として嗜好されている場合と、そうでない場合がある。このような、嗜好される“O.S.R.S.”の違いの背景には、“O.S.R.S.”で享受できる環境の質の違いが考えられる。つまり、“O.S.R.S.”が嗜好されるためには、“O.S.R.S.”で享受できる環境の質が条件になると考えた。

そこでここでは、“O.S.R.S.”で享受可能な環境の質を“O.S.R.S.”の性質とし、その違いに基づく条件について検討した。その結果から、各市街地条件で地域住民から嗜好される“O.S.R.S.”の形成に当たって、どのような“O.S.R.S.”の性質の提供が重要な条件となるのかを把握できると考えた。このため、地域住民が最も嗜好する“最も気に入りの場所”として選択された“O.S.R.S.”の選択理由を把握・検討した。

具体的には、まず、“O.S.R.S.”の選択理由として考えられる“O.S.R.S.”の性質を表－3 に示す如く設定した。この性質の設定にあたっては、自然系の環境諸要素に係わる内容を自然系の性質とし、また都市系の人々の行動等に係わる内容を都市系の性質とした。この中で、“O.S.R.S.”の自然系の性質については、動植物の存在（生物系）、広がりのある空間の存在（空地系）、微気候の緩和に係わる木陰などの存在（微気候系）、水の存在（水辺系）などに係わる内容に従って設定した。また、“O.S.R.S.”の都市系の性質については、人々の滞在に係わる行動（滞在系）や行き来に係わる行動（往来系）、家族や知人とのコミュニケーションに係わる内容（交流系）、工作物などに係わる内容（鑑賞系）に従って設定した。アンケート調査では、これらの性質に対応した選択項目を表－3 に示す如く設定し、複数回答形式で“最も気に入りの場所”の選択理由を回答してもらう設問を設定した。

次に、市街地条件の分類毎に、“最も気に入りの場所”として嗜好された“O.S.R.S.”の種類と“O.S.R.S.”の性質との対応を、選択理由の指摘率の特性として把握した。その結果は表－4 に示す如くである。これは、“最も気に入りの場所”で地域住民が享受している“O.S.R.S.”の性質の特性を示している。な

図－6 “最も気に入りの場所”の種類と訪問頻度

表－3 “O.S.R.S.”の性質の分類と“最も気に入りの場所”の理由

“O.S.R.S.”の性質の分類		“最も気に入りの場所”の理由 （アンケート調査での選択項目）
自然系	生物系の性質	美しい草花がある、鳥や虫の音がする
	空地系の性質	広い芝生地がある
	微気候系の性質	気持ちのいい木陰がある
	水辺系の性質	池や小川がある
	滞在系の性質	食事の場所になる、のんびりとくつろげる、ボールなどで遊べる、軽い体操ができる
都市系	往来系の性質	通り抜けると近道になる、自宅から近い、職場から近い、散歩ができる、ジョギングができる
	交流系の性質	待ち合わせに便利、幼児が遊べる、遊具や砂場などがある
	鑑賞系の性質	噴水や彫刻がある

表－4 “O.S.R.S.”の種類と地域住民が享受できる性質

“O.S.R.S.”の性質 （“最も気に入りの場所”の理由）		自然系の性質 都市系の性質							
市街地条件毎の、“最も気に入りの場所”として選択された“O.S.R.S.”の種類		生物系	空地系	微気候系	水辺系	滞在系	往来系	交流系	鑑賞系
分類A	種類 3（公園関係）	△	+	○	+	△	●	△	+
	種類 4（街路関係）	△	-	○	-	△	●	+	-
	種類 5（河川・森林関係）	-	-	△	-	△	●	-	+
分類B	種類 3（公園関係）	○	△	○	+	○	●	△	+
	種類 4（街路関係）	△	-	○	+	+	●	-	-
	種類 5（河川・森林関係）	●	+	△	-	△	●	○	-
分類C	種類 6（歴史関係）	+	-	○	+	△	●	+	-
分類D	種類 3（公園関係）	△	+	△	+	○	●	○	+
	種類 4（街路関係）	△	+	△	+	△	●	△	-
	種類 6（歴史関係）	+	-	○	-	+	●	○	△
分類E	種類 1（文教施設関係）	○	△	-	-	○	●	△	-
	種類 3（公園関係）	+	-	△	+	○	●	○	-
	種類 5（河川・森林関係）	△	+	△	△	○	●	△	-
分類F	種類 6（歴史関係）	△	-	○	△	△	●	+	-
分類G	種類 3（公園関係）	+	+	△	+	△	●	△	-
	種類 1（文教施設関係）	-	-	-	-	+	○	○	-
	種類 3（公園関係）	△	-	+	+	○	●	△	-
分類G	種類 5（河川・森林関係）	●	-	△	+	+	●	+	-
	種類 9（農地関係）	○	-	-	+	○	●	△	-

注）表中の●、○、△、+、-の記号は、住民が“最も気に入りの場所”とした理由の指摘率の範囲を示している。
 ● 75%以上、○ 75～50%以上、△ 50～25%以上、+ 25 未満、
 - 指摘なし

お、選択理由の指摘率は、市街地条件の分類毎に、“最も気に入りの場所”として選択された“O.S.R.S.”の種類毎の選択者数(分母)に対する、“O.S.R.S.”の各性質の指摘者数(分子)の百分率として算出した。また、表-4では、指摘率のばらつきに配慮し、“最も気に入りの場所”として選択した被験者数が5名以上の“O.S.R.S.”の種類について示した。

ここで設定したいずれの“O.S.R.S.”の性質も、地域住民が享受できることが重要である。このため、各々の“O.S.R.S.”で、いずれかの性質を地域住民が享受できること、また、各市街地条件に対応した地域全体としては、これらのすべての性質を地域住民が享受できることを前提とした。

この前提を踏まえ、“最も気に入りの場所”として嗜好される“O.S.R.S.”で、地域住民が享受できる“O.S.R.S.”の性質について検討し、以下の諸条件を把握した。

- ・自然系の性質についてみると、ほとんどの市街地条件の分類で、空地系及び水辺系の性質を伴った“O.S.R.S.”は少ない。このことから、各市街地条件では、空地系及び水辺系の性質を享受できる“O.S.R.S.”の確保が条件となる。
- ・各市街地条件で生物系の性質を享受できる“O.S.R.S.”は存在するが、この性質が比較的多く指摘された“O.S.R.S.”の種類は、限られている。このことから、いずれの市街地条件でも、多様な動植物の棲息することが可能な“O.S.R.S.”の保全と活用、または生物系の性質を地域住民が享受できる“O.S.R.S.”の創出が条件となる。
- ・微気候系の性質については、市街地の中心部及びその周辺に位置する分類A,B,C,Dで比較的多く指摘される。しかし、縁辺部に位置する分類E,F,Gでは、この性質が指摘される割合は少ない。このことから、縁辺部に位置する市街地では、緑陰などの微気候に係わる性質を享受できる“O.S.R.S.”を確保することが条件となる。
- ・都市系の性質についてみると、いずれの市街地条件の“O.S.R.S.”でも、往来系の性質が多く指摘され、また人々の滞在に係わる滞在系の性質の指摘も多い。このことから、様々な往来系の性質を享受できること、または滞在できることが、各市街地条件の“O.S.R.S.”に共通する条件となる。
- ・交流系の性質を享受できる“O.S.R.S.”は、いずれの市街地条件にもみられるが、この性質の指摘される割合は低い。また、そのような“O.S.R.S.”の種類も限られている。このことから、より多くの地域住民が交流系の性質を享受できる“O.S.R.S.”を確保することが条件となる。
- ・鑑賞系の性質を享受できる“O.S.R.S.”は、全ての市街地条件の分類でほとんど指摘されていない。このことから、彫刻な

どを前提とした鑑賞系の性質は、“O.S.R.S.”に対する地域住民の嗜好に寄与しないか、またはこれに対応した“O.S.R.S.”が存在していないかを検討することが課題となる。

4. おわりに

本研究では、多様な“O.S.R.S.”が存在し、地域住民から嗜好されることが、生活環境に対する人々の満足感の向上に寄与するとの観点から、“気に入りの場所”の形成に係わる諸条件を検討した。具体的には、まず、市街地条件を人口特性及び制度の側面から設定し、土地利用を指標とした①市街地条件毎に求められる“O.S.R.S.”の条件、また、アンケート調査を通じて②地域住民の「生活年数」によって生じる生活環境の満足感や“気に入りの場所”の多様性の違いに基づく条件、③“O.S.R.S.”への「訪問頻度」の違いに基づく条件、④“O.S.R.S.”で享受できる「環境の質」の違いに基づく条件などについて検討した。

本研究では、小学校区を調査単位とした市街地条件を設定し、これについて調査・検討を進めた結果、“気に入りの場所”として、地域住民から認識・嗜好される“O.S.R.S.”を形成するための幾つかの条件を把握できた。しかしながら、地域住民の生活行動を基調とした具体的な計画条件の設定のためには、さらに検討する必要がある。

地域住民から嗜好される“O.S.R.S.”の形成を通じて、地域住民の生活環境に対する満足感の向上を計画的に図るための具体的な条件を設定するためには、地域住民の生活行動と“O.S.R.S.”との相互関係の明確化が課題となると考える。この相互関係を明確化するためには、“O.S.R.S.”を認識し、嗜好する可能性のある地域住民の生活行動の類型化及び各類型と“O.S.R.S.”との対応関係を明確化する必要があると考える。そのためには、本研究で把握した、市街地条件毎に求められる“O.S.R.S.”の条件や、“O.S.R.S.”への訪問頻度の違いに基づく条件を基調に、地域住民が“O.S.R.S.”を認識し、嗜好する可能性に係わる生活行動を検討する必要があると考える。

また、地域住民から嗜好される“O.S.R.S.”を計画的に確保するためには、既存の“O.S.R.S.”と、地域住民から必要とされる“O.S.R.S.”の需要との相互関係を捉えることが課題となると考える。そのためには、本研究で把握した、地域住民の生活年数によって生じる生活環境の満足感や“気に入りの場所”の多様性の違いに基づく条件、“O.S.R.S.”で享受できる環境の質の違いに基づく条件を基調に、地域住民の生活行動の様式と“O.S.R.S.”との対応関係を検討する必要があると考える。

参考文献・資料

1) 近藤公夫(1978): オープンスペースのシステム: 造園技術大成, p.410~p.426, 養賢堂	Vol.58, No.5, p.221~p.224	6) 包清博之, 杉本正美(1996): 生活環境の質の向上に係わるオープンスペース及び関連空間への接近性に関する研究: 造園雑誌ランドスケープ研究, Vol.59, No.5, p.217~p.220
2) 包清博之, 杉本正美(1995): 住民意識からみた生活環境に関わるオープンスペース及び関連空間の系統化に関する研究: 造園雑誌ランドスケープ研究	3) 福岡市都市整備局都市開発部画整理課(1992): 福岡市都市区画整備区域図	7) 日本公園緑地協会(1986): 造園施工管理, 改訂版, 法規編, p.137
	4) 福岡市総務局総務部統計課(1985): 福岡市の人口(住民基本台帳)	
	5) 福岡市総務局総務部統計課(1990): 福岡市の人口(住民基本台帳)	

Summary: The various kinds of open space and its related spaces exist in urbanized area. These spaces are important as qualities of the living environment. Therefore, in this study, it was intended to investigate the requirements to improve the “Open Space and its Related Spaces” as “places of meaning” in Fukuoka-City.

As a result of this study, the “places of meaning” which can be used to develop planning guidelines for future O.S.R.S development were identified through the term of living years, the degree of satisfaction of their environment, the frequency of peoples’ access and the property of the “Open Space and its Related Spaces” were examined as the elements.